

## 住宅建築賞2022

主催 一般社団法人 東京建築士会

企画 東京建築士会 事業委員会

後援予定 公益社団法人 日本建築士会連合会  
一般社団法人 東京都建築士事務所協会  
一般社団法人 日本建築学会 関東支部  
公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部  
株式会社 新建築社  
株式会社 エクスナレッジ

協賛 株式会社 建築資料研究社 日建学院

協力 リビングデザインセンターOZONE  
工学院大学 木下庸子研究室

### お問合せ先

一般社団法人 東京建築士会  
中央区日本橋富沢町11-1 富沢町111ビル5階  
tel.03-3527-3100 fax.03-3527-3101  
[E-mail] jks@tokyokenchikushikai.or.jp  
www.tokyokenchikushikai.or.jp



# RESIDENTIAL ARCHITECTURE PRIZE

住宅建築賞2022入賞作品集

### ■住宅建築賞 入賞者

住宅建築賞 金賞

畠山 鉄生 + 吉野 太基

住宅建築賞

小林 佐絵子 + 塩崎 太伸

横井 創馬 + 佐瀬 和穂 + 大沢 美幸

武田 清明

# 住宅建築賞 入賞作品

2022年 | 一般社団法人 東京建築士会

## 応募主旨

審査員長 平田 晃久

### 【共生系としての住宅】

私たちの身体の表面には様々な微生物の織りなす生態系があり、身体にとって不可欠な役割を果たしています。人間の身体そのものが一つの共生系なのです。微生物的自然は目に見えません。しかし確実に私たちの周りの空気を変え、行動や思考の根底をかたちづけています。COVID-19の引き起こした事態は、よくも悪くもこの目に見えない自然とのつながりを顕在化させました。これに対する反応はおそらく次の二つに分かれます。ひとつは徹底した除菌やグリーンさ、あらゆるレベルでの異物の混入を防ぐ管理体制に向かう反応です。これらは緊急事態や医療機関において、たしかに必要です。しかし私たちの生活の全てにこれらが過剰に行き渡った未来はディストピアでしかないでしょう。もうひとつの反応は、私たちの存在そのものが、多様な生物の織りなす共生系であることを認め、目に見えないものも含めたさまざまな生の気配に耳を傾けることです。他者を遮断し純粋な空間や建築をつくるのではなく、移り変わる環境の中で、時に適切な距離を発生させながら、異なるものが共存する場をつくること。このことがかつてなくリアルな挑戦である時代に、私たちはいます。住宅は希望です。なぜなら、住まい手の感覚とつくり手の工夫によってこのふたつの対立を乗り越え、他の建築に先駆けた可能性を示せるからです。さまざまな共生系としての住宅の試みは、この度のパンデミック以前からありました。そして改めていま、共生系としての住宅の価値を問うような建築を評価し、未来に向けた議論のきっかけにしていきたいと思えます。挑戦的な作品を期待しています。

## 応募要項

- 上記の主旨にかなうもの
- 一戸建住宅、集合住宅及び併用住宅等とする(大幅な増改築、公共の建築も含む)
- 原則として作品は下記提出期限日より3年以内に竣工したもの
- 雑誌等に発表したものでもよい
- 建築物の所在地は1都3県(東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県)とする
- 応募の点数は自由とする
- 審査員の関与した作品は応募できない
- 応募者は予め建築主(所有者)・施工者の了解を得て応募すること

## 応募要件

賞の対象 | 設計者・建築主・施工者の3者を顕彰するものとする。

応募資格 | 応募作品を設計した建築士資格を有し、建築士会正会員である者

登録料 本会正会員:無料(申込時に入会した方を含む)  
他道府県 建築士会 正会員:1点につき5,000円(作品を郵送する場合、登録料は現金書留にてお送りください)

提出資料 | 申込書及び本会指定A2版台紙

※書類審査を通過した場合、建築士免許コピー及び検査済証のコピー(確認申請不要物件は、不要理由を明記した文章)の提出を求められることがある

図面及び完成写真数点(内・外観)、平面図、立面図、断面図、配置図、設計主旨(300字以内)等をA2版台紙一面(本会指定の用紙・縦つがい、パネル化しない)におさめること。なお、写真の大きさ図面等の縮尺及びレイアウトは自由とする。プレゼンテーションの表現自体は、審査の対象としない。

提出資料取得方法 | 申込書及び本会指定A2版台紙は本会事務局において頒布します。郵送希望の場合は、宅配便着払いにてお送りできます。専用申込フォーム(右記QRコード)またはE-mailにてご請求ください。E-mailの場合、①件名を住宅建築賞申込希望、②氏名、③送付先、④連絡先、⑤所属建築士会名と会員番号等を明記のうえ、送信ください。なお、事務処理の迅速化を図るため、宅配便着払い承の旨お書き添えください。(E-mail:jks@tokyokenchikushikai.or.jp)



提出先 | 一般社団法人東京建築士会 住宅建築賞係  
〒103-0006 中央区日本橋富沢町11-1富沢町111ビル5階 TEL 03-3527-3100

提出期限 | 2022年2月10日(木) 窓口へ直接お持込みの場合は、2月10日(木)17:00迄とする。郵送の場合は、2月10日の消印有効。

## 審査員

審査員長 | 平田 晃久

審査員 | 加藤 耕一 / 曾我部 昌史 / 山田 紗子 / 吉村 靖孝

## 審査

1 | 書類審査に通過したものは原則として現地審査する。 ※現地審査の実施方法については現在検討中である。

2 | 入賞発表 2022年4月中旬

- ・審査結果については、応募者に直接通知する
- ・応募者は審査結果について異議を申し立てることができない

### 表彰及び賞金

- 入賞者(5点以内)に対し賞状(盾)及び賞金を贈り、入賞者の中から特に優れたものには金賞を贈る。  
住宅建築賞 70,000円 住宅建築賞金賞 150,000円
- 建築主、施工者には入賞を記念する盾を贈呈する。
- 表彰式:本会定時総会の席上(6月上旬開催予定)

### 応募図面の取扱い

- 応募A2版台紙の公表及び出版の権利は主催者が保有する。
- 入賞作品は本会ホームページ及び会報等に掲載する。また、入賞作品展(公開展示:7月開催)の予定がある。
- 入賞作のうち、東京都内に建築されたものの中から1点を「関東甲信越建築士会ブロック会」の優良建築物表彰候補作品として、推薦することがある。
- 応募作品は返却しない。

## 審査結果(2022年 住宅建築賞)

応募点数 58点 住宅建築賞 入賞4点(内金賞1点)

住宅建築賞金賞	河童の家 (神奈川県)	■設計者: 畠山鉄生+吉野太基(アーキペラゴ アーキテクトスタジオ) ■建築主: 奥田翔、奥田千尋 ■施工者: 株式会社山田建設(建物構造:木造一部鉄骨造)
住宅建築賞(受付順)	菊名貝塚の住宅 (神奈川県)	■設計者: 小林佐絵子+塩崎大伸(アトリエコ) ■建築主: 塩崎大伸・佐絵子 ■施工者: 株式会社相川スリーエフ(建物構造:木造)
	ニセカイジュウタク (東京都)	■設計者: 横井創馬(横井創馬建築設計事務所)+佐瀬和穂(佐瀬和穂建築設計事務所)+大沢美幸(みゆき建築計画設計部) ■建築主: 株式会社三栄建築設計 ■施工者: 株式会社三栄建築設計(建物構造:木造)
	鶴岡邸 (東京都)	■設計者: 武田清明(武田清明建築設計事務所) ■建築主: 鶴岡清一 ■施工者: 株式会社大平建設(建物構造:鉄骨造)

## 参考資料

一次審査結果 2022年3月1日(火)実施。応募作品58点より、1人6点~10点を投票(審査員5名)

### 【一次投票】

投票した作品番号

審査員	作品番号									
平田	7	8	12	29	31	35	37	39	40	—
加藤	10	16	22	31	39	50	55	—	—	—
曾我部	7	16	29	31	37	39	—	—	—	—
山田	3	8	12	31	35	39	40	58	—	—
吉村	7	8	11	12	34	37	39	40	57	58

### 一次投票結果

(計19点)

獲得票数	作品番号	合計
5票	39	1作品
4票	31	1作品
3票	7、8、12、37、40	5作品
2票	16、29、35、58	4作品
1票	3、10、11、22、34、50、55、57	8作品

一次投票で選出した19作品より議論のうえ、二次投票を行った。

下記4点を一次審査通過とし、二次(現地)審査対象とした。二次(現地)審査は、3月20日(日)に実施した。

7 35 39 40

### 【二次投票】

投票した作品番号

審査員	作品番号			
平田	8	12	35	40
加藤	7	31	35	40
曾我部	7	31	35	37
山田	8	12	35	40
吉村	7	8	11	40

### 二次投票結果(下記8点より、議論) (計8点)

獲得票数	作品番号	合計
4票	35、40	2作品
3票	7、8	2作品
2票	12、31	2作品
1票	11、37	2作品



一次審査風景

建築を言葉を通して語ることは重要だし、建築をつくる時に言葉の果たす役割の重要さは、改めて強調するまでもない。しかし、建築のありようそのものが言葉を超えて、言葉では表現できない微妙さで、それでいてとても明快に何かを語りかけてくることがある。そう、言葉を超えるからこそ建築を作る意味があり、そこにこそ建築の面白さがあるのだ。金賞となった「河童の家」を見ながらそんなことを考えずにはいられなかった。この小さな住宅は、隣家の庭の一部だった場所に漂と建っている。昭和のモダニズムの香り漂うピロティが印象的な隣家は、よく手入れされた庭と共に味わい深い趣をたたえている。隣家にとってこの新しい住宅が建つ事は必ずしも望ましいことでは無いように見える。しかし、様々な事情から庭の一角を手放すことを決断し、この場所に建つ新しい家との共存を受け入れた隣家との関係のリアリティーを、この家ほど絶妙に繊細に詩的に建築のあり方へと昇華させた住宅があったらどうか。無駄な窓をあげずシンプルに研ぎ澄まされた緑青のボリュームは、



庭の草木と良く合っている。同時にかつて何も建っていなかった庭を想像すると、このボリュームの存在にある種の違和感を感じるわけだが、逆に言うこの

違和感と共存の調和がハイブリッドした状態こそ、現在ここにこの家が建っている状況そのものをあらわしている、とも言える。まさにそれが、ここにおける共生のかたちなのだ。優れた文学における的確な描写のように、この建築はそれ自身が建っているということの複雑な総体を、簡潔に美しく描写している。それも言葉にできない建築のあり方で、だ。内部はプレースを兼ねた階段が、微妙に高さの異なる床を一体的につないでいる。ある意味で形式主義的な感じもある。しかし、この空間には形式的操作だけでできた空間に感じる空疎さはない。むしろ確かな居心地や情感を感じるほどに、解像度高く考え抜かれている。踊り場のない階段も、上りにくさは不思議とない。金賞決定の過程で、審査員一同がほとんど自然にこの建築を選ぶことに一致したのも、確かな解像度で、ふたつの住宅の共生を描き切った作者の確かな力量を認めたことだと思ふ。

「鶴岡邸」は金賞になってもおかしくない、野心的な作品である。建築的に多少の無理や矛盾があったとしても、自らの描きたいものを描き切ることへの情熱が感じられる作品で、そこに漂っているエネルギーは、皆を惹きつけるに十分なものであり、作者の力量と

情熱に敬意を表したい。共生系というテーマに対して、緑や公園の生態系との共生という分かりやすい設定になっている。ただ、この建築の最大の特



徴となっている小さなヴォールトの連なりが、緑化において肝要な土のあり方や水の流れと、完全に納得いく形で結びついているのか、疑問を投げかける意見もあった。また、2階と全体の結びつきが、階段のありようも含めて少し弱く感じられた。多少の強引さはむしろ魅力のひとつだと、ポジティブに見たいとは思ったのだが、最終的には総合的に見て「河童の家」に軍配が上がる運びとなった。「菊名貝塚の住宅」は、写真で見るとより実物が格段に格調高く確かな考え方やディテールで作られていることに驚いた。金物などの選択や、家具や調度品のありようが、スケールのにも質感的にも素晴らしく、少々洒脱過ぎるのではないかと、思ったほどだ。他方で天井のヴォールト状のかたちや角部の繊細なディテールは、地面とのぶつかりを感じさせる建築全体の考え方に対してどういう位置付けなのか、少し分かりにくいと感じた。

「ニセカイジウタク」は、道のようなものの一筆書きがそのまま生活の場になってしまうという驚きを形にしようとした力作である。ねじれた一筆書きだから、二世帯で住むこともできるような多様な視線の遮断と交錯がある。ただ道というコンセプトと、木造のグリッド状架構の表現の間にあるギャップが気になった。同じアイデアはさらに昇華されたものに高めることができそうである。

以上のように今年も共生系というテーマに対してユニークな読み取りが可能な作品が多く、審査過程での議論はとても刺激的で楽しいものだった。その中でも、テーマに対して新鮮な視点を与えてくれた金賞作品に出会えたことは、建築というものの豊かさを再認識させてくれる機会となった。



一次審査風景

# 作品講評

2022年 住宅建築賞 作品講評

住宅建築賞 金賞

河童の家

設計者

畠山鉄生+吉野太基(アーキペラゴ アーキテックススタジオ)

講評者

吉村 靖孝

あいにく我々が訪問した時刻にはすっかり日が落ちていた。バスを降り少しばかり歩いて視界に飛び込んできた河童の家は、暗闇のなかにぽっかり空いた穴のようであった。まるで風景の一部をマスキングしているかのような不思議な佇まいで、上空から見た東京の夜景の、皇居や御苑を彷彿させた。その後、隣家の庭の一部に建つことになった経緯や、その特殊な状況に対する配慮を聞いて、穴のような建ち方が完全に意図されたものであることを知った。庭の植物に擬態する深い緑色も、徹底したディテールの捨象も、輪郭の認知に揺さぶりをかける仕掛けだったのである。存在を誇示しようと試みているのか、抹消しようと試みているのかよくわからなくなったのは、まさしく設計者の思惑通り、こちらの脳がバグっていたのだ。我々建築家は、周辺環境を一方的に取り込むことを共生と呼んでしまいたくなる誘惑と常々闘っているが、それは誤りである。河童の家は、繊細かつ大胆に周辺環境の質に貢献しており、正しく共生していると感じた。それが第一印象である。



玄関を入るとすぐあの階段が現れる。昼間ならば、窓のない井戸の底のような一階から光に溢れた三階までの移動は、さぞかし劇的なシーケンスであっただろう。細かなステップフロアを効率よくつなぎ、トラスを構成し構造体を兼ねるこの階段も、輪郭の無化・最小化に端を発する小さなフットプリントの副産物である。構造だから当然、最上階では天井に達する



が、屋上に行けるわけではないので、そこに階段本来の意味はない。しかし意味を失ったからこそ独特の存在感を湛えている。過激な小ささを解くための、構造部材と階段の掛け合せという工学的な選択が、むしろ詩的な情感を生んでいるのだ。建物の内外で、よく似た理性と詩性の相互依存が起こっている。これを理と詩の共生と呼ぶこともできるだろう。感染症や戦争が蝕む日常にこそ、こういった詩が必要だと強く感じた。

住宅建築賞 菊名貝塚の住宅

設計者 小林佐絵子+塩崎太伸(アトリエコ)

講評者 加藤 耕一

不思議な住宅である。崖の斜面に建つ、もとはシェアハウスだった建物のリノベーションなのだ。斜面に設けられた階段を登り、小さな気持ちの良いテラスを通り抜ける。少し小ぶりな玄関扉からくぐり入ると、そこには地中海の遺跡発掘現場のような不思議な空間がひろがっていた。煉瓦色のタイルが敷き詰められた床面は細長く、地形を反映してテラス状の段差をつくりだす。それに続く段差は衝撃的だ。床が抜かれ、深さ2メートルはあろうかという地下のピットがぽっかりと口を開け、コンクリートの基礎が露出しているのである。落下に対する身体的な恐怖と、地下空間から湧きあがってくる暗さと重さを肌で感じながら上部に目を向けると、今度は一転して軽快でやわらかな世界がひろがる。木造架構の小屋組を飲み込むようにして丁寧に施工された段々のヴォールト天井が、あたかも南仏の古い建築のような不思議な魅力を生み出している。崖地に作られたもとの建築の「強い構造」のポテンシャルを引き出し、マテリアルと建築形態の魅力を加えて作られた、見事な作品である。



住宅建築賞 ニセカイジュウタク

設計者 横井創馬(横井創馬建築設計事務所)+佐瀬和穂(佐瀬和穂建築設計事務所)+大沢美幸(みゆき建築計画設計部)

講評者 曾我部 昌史

長手断面を見ると3x3の9つに分節された空間が立体的に並ぶ。間口は小さいから、概ねこれが全貌である。ほとんどの柱と梁が同じ断面であるためか、空間相互の関係は割とニュートラルで、これらが二重らせんのように巡る階段で関係づけられる。空間相互の繋がり方を管理することで、その組み合わせ方は100を越えるらしい。暮らしの場として体験してみると、そのこと以上に、移動で得られる感覚のうつろいが豊かなことに可能性を感じた。そう考えると、開口部が限定されているせいか、外部との関係によって生まれる場の個性が、必ずしも大きくないことが気にならなくもない。たとえば、1階西側にはパーゴラのあるテラス状の場がある。こと南北を繋ぐ通り土間的な場はより一体的であっていい。現地での説明では、当初2階建てで計画をしていたが、3階建てに変更せざるを得なかったことだ。そのことで開口面積が限定されたことが影響したのかもしれない。



住宅建築賞 鶴岡邸

設計者 武田清明(武田清明建築設計事務所)

講評者 山田 紗子

石神井池の水面と緑を正面に建つ、とてもオープンな住宅。前日の夜に降った雨が雨樋や躯体のコンクリートから滴り落ちるさまが瑞々しかった。武田さんの説明のとおり、水が大地へと循環してゆく、その中に住まうということの美しさを垣間見た。人類の建築史とともにあるポルトという建築言語を、本来の組積造の重々しく閉鎖的な空間ではなく、極細のスチール柱によって持ち上げられているのは非常に不思議な感覚である。ずっしりとした土とコンクリートに挟まれながら、水平に抜けていく風景はとても透明で、包まれながらも外へつづいてゆく感覚が心地良かった。2階床スラブ内部にはほとんど土が入っていないことの違和感や、排水システムの合理性、2階住居の出入口をはじめとするプランニングとコンセプトの不一致などが議論された。しかしいずれにしても、建築や家の在り方を広げてゆく住宅であることには違ひなく、とても魅力的な住環境を提案していた。



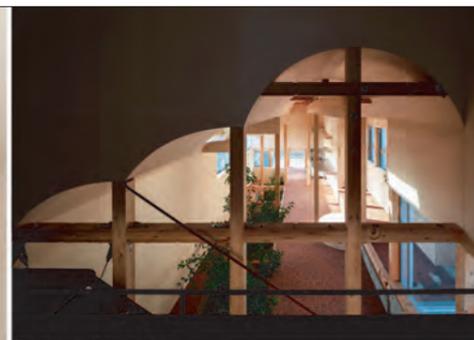
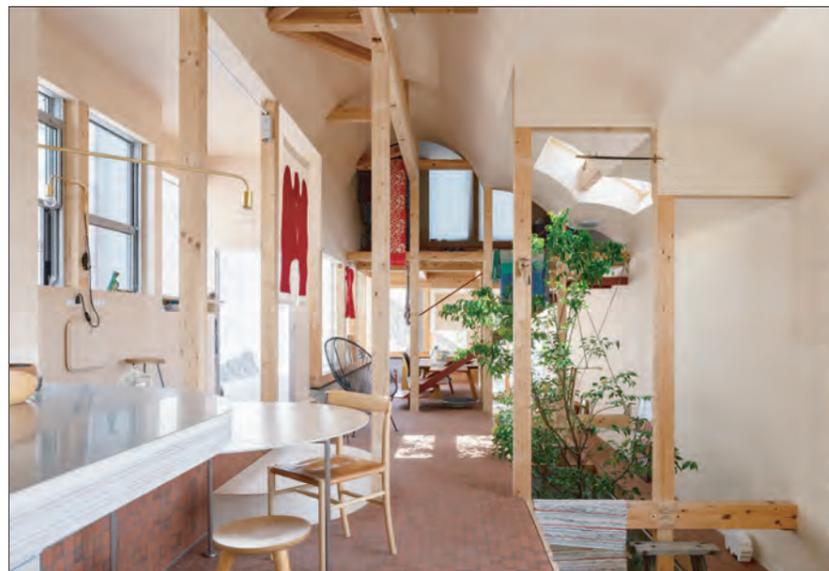
**河童の家**  
**畠山鉄生**  
 畠山はもともとは建築の大きな産地であったため、築かれた建物の質に特異的に高水準でなく、固くはないが、新しい気持を出さずにはいられなかった。大層に築かれた建物と人工物ともいえない建物の表情が互に共存するように、これらを生かしながら、新たな変化し得る建物たちと共に、まちの風景の一部となっていく事を期待している。また、経年変化で出る錆が、温かみを感じさせる。

**多様な場**  
 坪間は古い大邸で、大邸屋敷のバリエーションを再現するためのスタジアムを求められた。フロアプランは24mほど、3階建てにもおなじみ取り、縦横の寸法で、平屋と2階建ての両方があるように出来た。階段は、階段を最大限活用しつつ小さな気持の中にも広がりがある。建物全体でワンルーム空間となるように、高さの段差を中央に3層に配置して、その両側に階段を、壁と高さの差を設けて階段とした。床は土間の内側をつなぎ合わせる。構造と仕上げを兼ね、その高さによって、光と風、人の気配を、階を跨いで横や縦に引き渡す。

**1階は、階段が居住スペースとバリエーションのための居住層と区別を付ける。階段を登っていくと、深い階段にはカウンター、同じような天井のように、自然に光を透かす。それによって土間階との関係が生まれていく。階段も高さと高さの差を設けて階段を、同じ高さによって、光と風、人の気配を、階を跨いで横や縦に引き渡す。**

**2階は、階段が居住スペースとバリエーションのための居住層と区別を付ける。階段を登っていくと、深い階段にはカウンター、同じような天井のように、自然に光を透かす。それによって土間階との関係が生まれていく。階段も高さと高さの差を設けて階段を、同じ高さによって、光と風、人の気配を、階を跨いで横や縦に引き渡す。**

**3階は、階段が居住スペースとバリエーションのための居住層と区別を付ける。階段を登っていくと、深い階段にはカウンター、同じような天井のように、自然に光を透かす。それによって土間階との関係が生まれていく。階段も高さと高さの差を設けて階段を、同じ高さによって、光と風、人の気配を、階を跨いで横や縦に引き渡す。**



\* 1 2Fから1Fホールを見る。



\* 2 夕景。アプローチ階段を上がり、建物を見る。



\* 3 ビット2からホールを見上げる。

\* 4 ビット5からホールを見上げる。



\* 6 ビット2からホールを見上げる。



\* 7 西立面

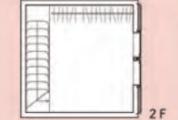
菊名貝塚の住宅

約15,000年前、縄文早期の痕跡を残す貝塚跡地に建つ木造建築の改修である。富士山を望む高台の平屋（一部2階）の可能性に魅せられ、貝塚を含んだ大地との暮らしに想いを馳せ、私たちは建物の一部に住み、季節ごとに具合を確認しながら解体を始めた。当初83.86㎡あった延床面積56.69㎡と小さくなったが、体感はある屋外のように開放的である。床下に眠っていた基礎が剥き出しとなり、防湿コンクリートに穴を開けて木を植えた。基礎下から冷気や土の匂いや雨染みが上がってくる。ホールと呼んでいる床からそれぞれのビット底までは、約1.6m～2.3mと前面道路の傾斜に沿って深さが異なる。一方、天井は幾分波動的なアール形状を連ね、長手方向を強調させた。

敷地面積 142.49㎡  
延床面積 56.69㎡  
建築面積 70.90㎡  
建ぺい率 49.90%  
建物高さ 5.49m

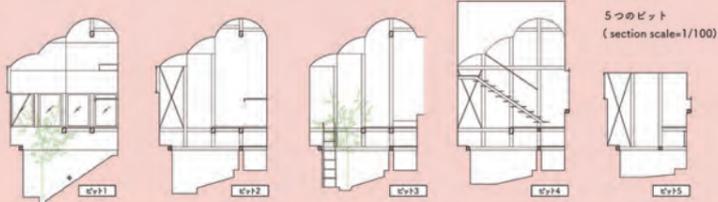
延床面積 56.69㎡  
1F: 43.73㎡  
2F: 12.96㎡  
容積率 39.78%

敷地東側が擁壁で囲まれているため、建物南東側は開口面積を増やし、外部と連続する居場所としている。

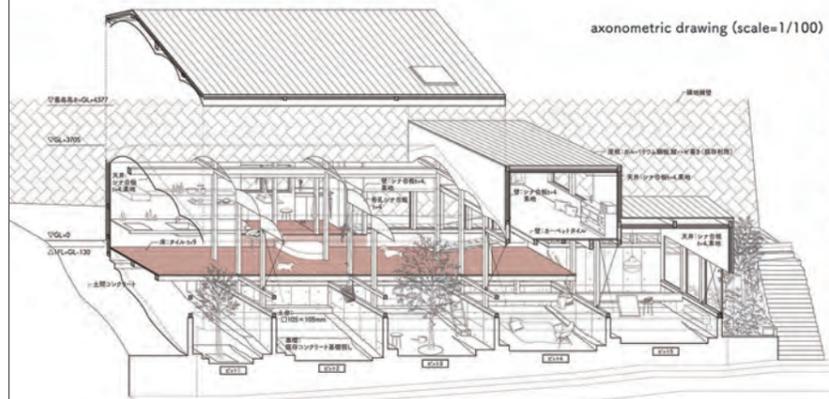


2F

1F plan (scale=1/100)



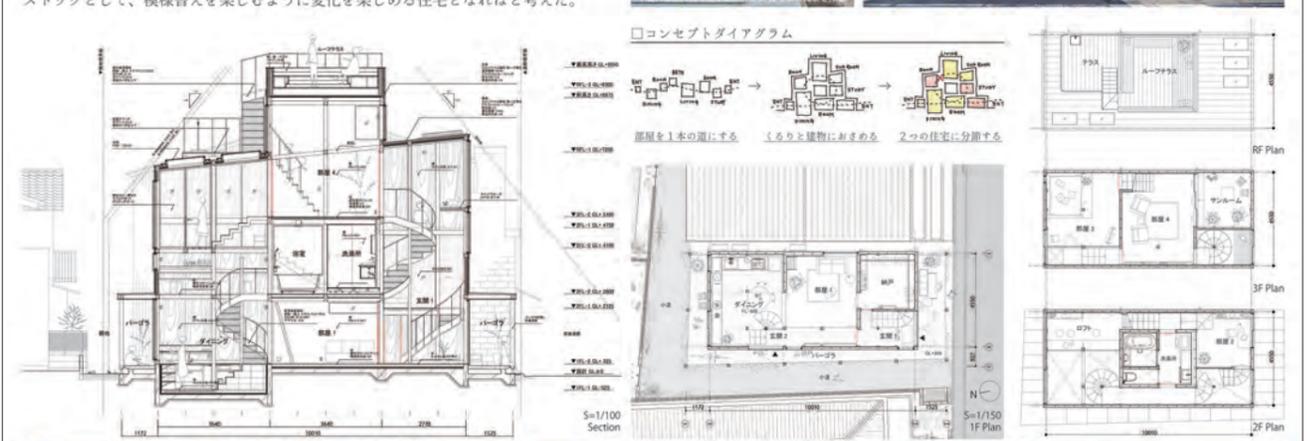
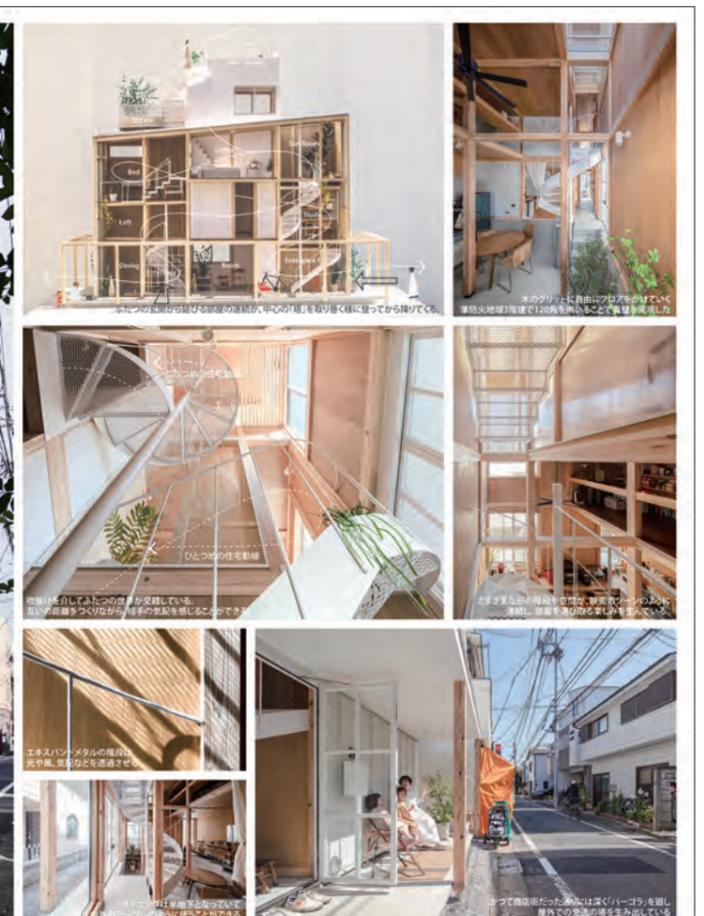
5つのビット (section scale=1/100)



axonometric drawing (scale=1/100)



「ニセカイジュウタク」は現代の二世帯住宅のすがたである。ライフスタイルや社会の変化など、移り変わる環境に柔軟に対応する住宅を目指し、住宅の中に2つの可変的な世界(領域)を作り出した本作品は、両親と夫婦、住宅と店舗、妻と夫、仕事と家など様々な2つの世界観をひとつの住宅の中に共生させている。ふたつの玄関から伸びる部屋の連続は、二重らせんのように登ってから降りてくる。途中どこかの扉を旋錠するだけでふたつの世界が分節され、その組み合わせは実に10通りを超えている。部屋の連続は吹抜けを介して行われるために密実な部屋同士に不思議な距離感や、相手の世界をすり抜けるような瞬間を生み出した。建物の周囲には庇と土間の「パーゴラ」が廻っていて、外の世界との結節点となっている。そこには人やモノがあふれ出し、住宅街に住まい手の色を表出させるとともに街との距離感を調整するアウトラインを作り出した。ハウスメーカーである三栄建築設計と協働した本計画は、人口が減ってゆく社会の住宅ストックとして、模様替えを楽しむように変化を楽しめる住宅となればと考えた。





鶴岡邸

「他生物を受け入れる建築」

二世帯の長屋住宅の計画。敷地は、湧き水の循環で多様な植物群落を支える石神井池に隣接する。建築は、深い土を背負った「連続ヴォールトスタブ」と「土のコア」で構成され雨水がヴォールトの山から谷へ、またコアを通り、大地そして池へと循環する。土壌の深さは、地盤だけでなく低木、中木までの生息を受け入れるとともに、人が住まう室内にも冬暖かく夏涼しい土に包まれた洞窟のような住環境を与える。鶴岡邸は、人だけでなく他生物も受け入れようとした建築である。生物と人工物の適切なバランスで構成された環境で、人と他生物が、直接触れ合い、恵みがありたく思える距離感でおくれる生活、ただそれをつくりたかった。

連続ヴォールトスタブはその下の空間を緩やかに分割し、プランムで足りない面積を、高さの差で補う。ヴォールトの天井高は、頂点で3500mm、谷部で2000mmとし、植物のつまずきがスラブとなり、歩コンを渡すことで、暮らしを支える構造体となっている。



スケルトンのように開放的な建築を、植物の持つ機能性で補完する建築計画。中木が成長すれば夏に日射遮蔽し、冬は遮断し日のあたたかさを取り込む。ネオバウスの庭には、ツブや葉が、植物の影の先に春を空気に送る。内外の境界が曖昧なことで交わり合う計画とした。



住宅建築賞受賞者プロフィール

河童の家



畠山 鉄生

HATAKEYAMA Tetsuo

1986年：富山県生まれ  
2011年：武蔵野美術大学卒業  
2013年：武蔵野美術大学大学院修士課程修了(菊地宏研究室)  
2013年：増田信吾+大坪克巨建築設計事務所勤務  
2017年：Archipelago Architects Studio設立

吉野 太基

YOSHINO Taiki

1988年：熊本県生まれ  
2011年：武蔵野美術大学卒業  
2015年：東京藝術大学大学院修士課程修了(乾久美子研究室)  
2015年～2019年：長谷川豪建築設計事務所勤務  
2020年：Archipelago Architects Studio参画

菊名貝塚の住宅



塩崎 太伸

SHIOZAKI Taishin

1976年生まれ  
2000～2001年：オランダ・デルフト工科大学  
2009年：東京工業大学大学院博士課程修了、博士(工学)  
2015年～：アトリエエコ共同主宰  
2016年～：東京工業大学准教授

小林 佐絵子

KOBAYASHI Sae

1977年生まれ  
2011年：東京理科大学卒業  
遠藤克彦建築研究所、ゼロワンオフィスを経て  
2015年～：アトリエエコ共同主宰  
2018年～：日本工業大学非常勤講師  
2022年～：東京理科大学非常勤講師

ニセカイジュウタク



横井 創馬

YOKOI Soma

1983年：東京都生まれ  
 2007年：日本大学理工学部建築学科卒業  
 (佐藤光彦研究室)  
 2007～2008年：坂茂建築設計(ヨーロッパ) 勤務  
 2008～2011年：SANAA 勤務  
 2012年～：セカイ/sekai 共同設立  
 2018年～：株式会社 横井 創馬 建築設計事務所  
 設立  
 2021年：チュロンコン大学(タイ) 客員講師  
 2022年～：日本大学理工学部建築学科  
 非常勤講師



佐瀬 和穂

SASE Kazuho

1982年：東京都生まれ  
 2008年：東海大学大学院工学研究科  
 建築学専攻修士課程修了  
 (上松祐二研究室)  
 2008～2010年：北海道や東京の  
 設計事務所に勤務  
 2011年～：株式会社ティケイスクエア 勤務  
 2019年～：佐瀬和穂建築設計事務所 設立



大沢 美幸

OHSAWA Miyuki

1990年：長野県生まれ  
 2013年：日本大学理工学部建築学科卒業  
 (八藤後研究室)  
 2013～2016年：アーキプラン(長野県) 勤務  
 2016～2021年：株式会社ティケイスクエア 勤務  
 2018年～：個人活動開始(みゆき建築計画設計部)

鶴岡邸



武田 清明

TAKEDA Kiyooki

1982年：神奈川県生まれ  
 2007年：イーストロンドン大学大学院修了  
 2008～2018年：隈研吾建築都市設計事務所勤務(設計室長歴任)  
 2019年：武田清明建築設計事務所設立  
 SDLビュー鹿島賞を受賞  
 2020年～：千葉工業大学非常勤講師  
 2021年～：日本女子大学非常勤講師  
 東海大学非常勤講師

# LIVING DESIGN CENTER OZONE

設計・インテリアのプロに向けたサービスが充実

リビングデザインセンターOZONEは、建材や住宅設備、  
 家具のショールーム・ショップが30以上集まる、住まいづくりの情報センター。  
 建築設計やインテリアの仕事に携わるプロの方々にもご活用いただいています。

FOR PROFESSIONAL

## 商品を探す

### SHOWROOM/SHOP

多様な暮らしに対応する  
 個性豊かなショールーム・  
 ショップで、商品の  
 機能性や素材感を  
 体感してみませんか。



## 情報を集める

### LIBRARY

建材・住宅設備・家具など、  
 様々なメーカーのカタログや  
 サンプル帳が閲覧できる  
 OZONEカタログ  
 ライブラリーを  
 ご利用いただけます。

詳細は  
 ウェブサイトから



<https://www.ozone.co.jp/pr/pro/>

建築・デザイン・  
 住関連商品情報など、  
 幅広い視点で専門的な  
 内容のプロフェッショナル向け  
 セミナーを開催しています。

### SEMINAR

## 学びを深める

住関連メーカーの  
 製品開発秘話や、  
 クリエイターの  
 インタビュー記事、  
 ショールーム商品を起用した  
 住宅モニター事例などを  
 ウェブサイトでご紹介しています。

### REPORT

## 知識を広げる



住宅・非住宅を問わず、空間づくりに携わるプロフェッショナルが対象の  
 会員制度(入会金・年会費無料)。セミナー受講割引から、商品購入の割引  
 (ビジネスでの購入限定)、ミーティングブースのご利用(有料)など、様々  
 な特典をご用意しています。



CLUB OZONEプロフェッショナル  
 特典内容・ご入会はウェブサイトから  
<https://www.ozone.co.jp/service/pro/clubozone-pro/>  
 ※個人のご入会のみになります。法人でのご入会は受け付けておりません。

リビングデザインセンターOZONE

東京ガスコミュニケーションズ(株) 〒163-1062 東京都新宿区西新宿3-7-1 新宿パークタワー 3-7F  
 tel: 03-5322-6500(代) 営業時間: 10:30-18:30 休館日: 水曜(祝日除く)、夏期・冬期休館、臨時休館(営業状況はウェブサイトでご確認ください)

[www.ozone.co.jp](http://www.ozone.co.jp)



## Tokyo Bath Style

オーダーデザインユニットバスのTokyo Bath Style。

厳選したTokyo Bath Style仕様の特注ユニットバスから、  
お客さまのイメージに合わせたオーダーユニットバスまで幅広くご提供いたします。

1. 家屋の揺れにも対応する防水性能はそのままに、在来工法並みの自由度を実現
2. バスタブや水栓、タイルなどを色々なメーカーから組み合わせて、自由なレイアウトが可能
3. 柱欠、梁欠、変形形状、トップライト、斜め天井などにも対応。リフォームに最適です
4. シャワーブース併設型のバスルームなど、お客様のご要望に応じてお造りしています

自由にデザインする  
バスルームを



FORM FOLLOWS  
PERFECTION



ハンスグローエグループの擁する「アクサー」は、ラグジュアリーなバスルームとキッチン空間を創造するための水栓、シャワーヘッド、アクセサリを開発、設計、製造しています。  
革新的で高い技術力とともに、フィリップ・スタルク、アントニオ・チッペリオなど世界的に著名なデザイナーとのコラボレーションによりアヴァンギャルドで比類のないコレクションを生み出し続けています。

**Tokyo Bath Style** 株式会社 東京バススタイル

TEL:03(3446)2492 FAX:03(3446)2493 e-mail:info@t-bath.net  
〒108-0071 東京都港区白金台5-3-7 くりはらビル2階 [営業時間]10:30~18:00 [定休日]日・祝祭日  
※カタログ資料のご請求は、「弊社HPの〈問合せ&資料請求〉」「FAX」「電話」にてお願いいたします

[www.t-bath.net](http://www.t-bath.net)

ハンスグローエ ジャパン株式会社 [www.axor-design.com/jp](http://www.axor-design.com/jp)  
ショールーム 〒140-0002 東京都品川区東品川2丁目2-4 天王洲ファーストタワー2F 03-5715-3074 (ご予約制)  
営業時間:平日・土 10:00-17:00 (祝祭日除く)

